いつ繰り返すとも知れぬ自然災害への備え

－十勝岳砂防－

石田　享平*

美瑛の街から十勝岳へと向かう途中、白金温泉に入る少し手前の３㎞程の区間に、道路がシラカバの樹林帯を抜ける場所がある。土地の人はこれを白樺街道と呼んでいる（**写真－１**）。その景観が多くの人々を惹きつけてやまない理由は、シラカバ自体の醸し出す高原的雰囲気もさることながら、自然林であるにもかかわらず木々の樹高が揃っておりスカイラインが整っていると同時に、林を構成する成木の樹径に同程度のものが目立つことがあげられる。この一見のどかで、平穏な印象を与えてくれるこの風景こそが、実は大正15年（1926）５月に発生し、開拓民144名もの命を奪った十勝岳泥流による大災害の爪痕そのものであることを連想することは容易ではない。この泥流災害とシラカバ林形成との関係について、「十勝岳災害関連緊急事業の記録[1)]」から引用してみよう。

「十勝岳災害関連緊急事業の記録」

噴火によって発生した泥流は、あっという速さで山の斜面を流れ下った。ハイマツ帯の表土をはぎ取ってシラカバ林帯に達し、優良林として知られていたエゾマツ、トドマツの密林、ハンノキ、イタヤ、ナナカマドなどの混交林の表土をも洗い流してしまった。新緑が芽吹き始めた豊かな森は、立木が表土と岩石とともに地すべりを起こして、ありとあらゆるものを流失してしまったのである。跡地は水の無い河原と化し、硫黄の悪臭に覆われた。（中略）自然の生命力は強じんそのものである。風に運ばれてきた種子が芽を出し始めたのである。旭川営林局（現支局）が行った植生試験によると、災害後２～５年目に『植生の侵入』が見られた。新発生植物は、アカエゾマツ、ダケカンバ、エゾマツ、トドマツ、オオイタドリなどであった。だが、初めのうちはせっかく芽生えてもすぐ枯れてしまい、集団をなして全面的に発生したのは６、７年目だった。（中略）シラカバやダケカンバは、酸性土壌に強く成長も早いので、まず集団として林を形成した。

＊　＊　＊　＊　＊

十勝岳の北西約10㎞程に位置する当該区間において

写真－１　白樺街道

樹径や樹高のそろったシラカバの樹林が形成されたのは、大正泥流が元々の原因であり、また自然の回復力や淘汰の力が影響して現状の風景が形作られたことは興味深い。他方、十勝岳周辺においては火山噴出物の度重なる泥流化を受けて、いくつかの川筋において砂防ダムが建造されてきた。しかし、コンクリートで作られたダムは、泥流災害が作り出した自然景観と調和が保たれるとは限らず、このような施設を無用に感じる人がいることも事実である。

これはいつ起こるとも知れぬ自然災害に対して備える施設の宿命なのかも知れない。火山泥流をはじめ自然災害は人知が及ばず、不意に生起することもしばしばであるが、ひとたびその牙をむき出しにするとき、強大な力で人々の人生を瞬時に打ちこわす恐ろしさを内在させている。かかる一方で、その災害が実際に起こる直前までの間は、それ以前の平穏が永遠に保たれるかのごとき幻想を人々に抱かせるような状況が続くことも多い。平均寿命が延びたとはいえ人生たかだか八十年の人間にとって、自然のサイクルを自らの体験のみにて計り知れないことは自明の理である。

十勝岳泥流の災害記録については、当時の北海道庁により克明に調査記録として残されている[2)]。また、三浦綾子はその労作において、大正大泥流を巡る人々の苦難と自然の猛威について著述している[3),4)]。作品

と道庁の記録とを読み比べるとき、三浦綾子が当時の災害記録を丹念に調べ、史実を踏まえつつ、自らの小説世界を展開させようとしたことには疑いがない。そこで、三浦綾子の「泥流地帯」と「続泥流地帯」との表現を借りながら、登場人物の人生と泥流災害との関わりについて光を当ててみたい。

小説の舞台は大正15年（1926)、上富良野に近い開拓農家である。当該地区に最初に開拓の鍬がおろされたのが明治30年（1897）頃であり、入植後約三十年を経過して、ようやく生活と生産の基盤が整いつつあった頃の話である。三浦綾子は次のように書いている。

「泥流地帯」p362

幾度も聞いた祖父の話だ。はるばる三重県からこの上富良野の野に辿り着いた日、ニレの木の下に野宿した人々の、不安と希望の交錯した表情が、耕作は目に見えるような気がする。それはたしか、四月十二日だったと聞いている。四月といえば、まだこのあたりは雪の残っている頃だ。耕作は、人間が生きるということのきびしさを感じながら、祖父の話に相づちを打つ。

何はともあれ、とにかく喜んで正月を迎えることができるのだ。昔は稲黍の餅をつくことさえぜいたくだった。それが今は、米の餅に黒豆を入れたり、よもぎを入れたり、ゴマを入れたりしてつくのだ。やはり豊になったのだと、耕作は部屋の中を見まわす。

＊　＊　＊　＊　＊

三重団体の入植地では当時既に稲作が定着しており、三十年の労苦の末にようやく米の飯を食べられる程までになっていたようである。また、餅に黒豆やよもぎ、ゴマを入れられるところには生活改善の意気込みも感じられる。開拓には家族ぐるみで入植するものが多く、三十年といえば入植当時働き盛りのものは老人の域に達し、若者や少年少女は働き盛りになるほどの期間である。そして、原始林であった土地を切り開き、生産が安定した頃、ようやく自らの選択の正しかったことをそれぞれに感じ始めた頃ではなかったかと考えられる。しかし、そのような人間の営為や心情にはお構いなしに、自然は猛威を振ったのであった。そのすさまじさは人々の想像を遙かに超える規模、現象であったことが次の表現から読みとることが出来よう。

「泥流地帯」p385

「兄ちゃん！あれ何だ？」

噛みつくような耕作の声に、拓一は指す方に目をやった。沢の入り口に、真っ黒い小山のようなものが押し寄せてくる。

「あっ！あれは！……」

拓一が驚く間もなく、その黒い黒山はみるみる沢口一杯にせり出して来た。と、その黒い小山は、怒濤が崩れるように出口に拡がった。＜一部略＞

と、瞬時に泥流は二丈三丈とせり上がって山合いを埋め尽くす。家が流れる。馬が流れる。鶏が流れる。人が浮き沈む。

＊　＊　＊　＊　＊

それまでの人生で築き上げてきたすべてが、人間関係さえもが瞬く間に失われていった瞬間であった。

前出の北海道庁の調査報文によると、「崩壊物はやがて積雪を融解して泥土と化し、一方は美瑛川に添って転下し、一方は富良野川の渓谷を猛烈な勢いで奔流し、その谷を掃蕩して上富良野原野に出た。泥流が硫黄山より流下して上富良野村鉄道線路に達する迄の時間は、諸家の研究を総合して約二十五分と推算する。（平均毎秒十米)」と書かれている（本文中一部旧字を新字に書き換えた。以下同じ)。ここに、美瑛側を流れ下った泥流のあとに再生した樹林帯が冒頭の白樺街道沿いの木々である。そして、上富良野側に走った泥流により、「泥流地帯」の舞台となった地域が、甚大な被害を受けることになったのである。同報告に添付されている泥流分布図（**図－1**）と、上の解説文とを比較して読んでいただきたい。火口から急斜面を疾風のごとく駆け下りた泥流が、美瑛側と富良野側に分かれ、富良野側の泥流は狭い谷間を一気に駆け下りた様が見えるようである。そして、谷から平野へと出た奔流は扇状に拡がっている。更に、平野部に出た後については、「更に泥流が鉄道線路を越え三重団体に拡がってからは速力も比較的緩やかになり、上富良野市街の裏手に達する迄には二十分以上を要したと見られている。」としている。渓流出口に近い鉄道線路部分から上富良野市街部の裏手までは図－1で3㎞程であり、上記資料の20分で割るとその平均速度は毎分150mとなる。これは障害物を避けつつ泥流から逃げようとする人々にとって、決して緩やかな速度であったとは思われない。

そして、主人公の目を通じて、被災地域の惨状は次のように表現されている。

「泥流地帯」p407

耕作は、今しがた丘の上から見た三重団体の水田地帯の惨状を思った。五百町歩に余る水田が泥の海と化していた。しかも、おびただしい流木が泥の海一面に散乱し、その数二十万石は下るまいと思われた。その

中を走る鉄道路線が、枕木ごとめくれ上がって柵のようになっているのも無惨だった。

「続泥流地帯」p54

（兄ちゃん、こんな仕事、無駄じゃないのか）

いつ片づくとも知れない流木を片づけ、掘り起こしたところで、この硫黄と硫酸をふくんだ土地が、稲田になるとは耕作には到底思えない。今のうちに諦めさせることが本当だという気もする。泥流に流された葉書が、インクが消えて白くなっていたと聞く。亜硫酸がインクを消したのだ。インクが白くなる土に、一体何が出来るというのだろう。

＊　＊　＊　＊　＊

不安と希望の交錯する思いを抱きつつ未知の土地に入植した人々が、三十年もの年月と人生を捧げて築いたもののすべてが一時の間に失われる。そんな経験をした人々の心持ちを適切に表現する言葉があろうとは思われない。当時、被災地の土壌が耕作地としてあまりにもひどかったことから、復興のために資金を投ずることに対して反対する運動が根強くあったと記録にもある。しかし、それでもなお明日という日を生きねばならない自分、否、過去を引き継ぐ自分、そして未来に引き渡さねばならない自分という意識が主人公の兄拓一を復興へと駆り立てる。そして、現在我々が目にする田園風景は時間が解決した姿ではなく、被災を受けてなお復興に立ち向かった人々の意志の結果であることを忘れてはなるまい。復興に立ち向かった人々の心情を、三浦綾子は次のように表現している。

「続泥流地帯」p23

「俺はなあ。じっちゃんやばっちゃんのことを思うとなあ。あの泥流の中に流された時のことを思うとなあ。あの激流にのみこまれたじっちゃんたちの姿を思うとなあ…三十年間の開拓の苦労が、あれで終わっていいのかって、考えるんだ」。

拓一は途切れ途切れにそう言った。

「続泥流地帯」p289

「卓ちゃんのこの苦労で、この田んぼがいい田んぼになったら、百年後、二百年後の人たちも、この田んぼのおいしいお米を食べれるんだもねえ」＜一部略＞

（そうだ！百年、二百年はおろか。一旦復興したなら、代々の人たちがこの田んぼで、喜びつつ耕していくことが出来るのだ）。

＊　＊　＊　＊　＊

十勝岳はこの大噴火以降も活発に活動を続けており、昭和37年（1962）と63年（1988）にも一連の火山活動が記録されている。また、「十勝岳災害関連緊急事業の記録」によると、ほぼ１～２年に一度の割合で、山麓のどこかで土砂害が発生していると記されている。規模の大小、被災の多寡は異なるものの、同様の災害は今もなお引き続き住民の暮らしを脅かし続けているのである。我々がその場に立って目にする十勝岳周辺の光景は、風光明媚な北海道らしい景観であり、きちんと整備された田園風景なのである。しかし、その眼前に展開する一瞬は百年以上の歴史の果てであると同時に、未来に連なっている瞬間でもあることを意識することは難しい。そして、いつまたこの平穏が破られないとも限らないのである。

我が国には八百万の神々が住むとよく聞かされていたのはほんの数十年前のことである。しかし、最近ではこの言葉を耳にする機会がとんと減っている。このことは我が国の近代化の過程と無縁ではないように思う。即ち、自然災害がいつどこで起こるか分からず、それを避けるすべが無く、また毎年のようになにがしかの被災を被っていた時代には、大地の恵みを授けるのも、召し上げるのも超越的な力と考えられたのも当然と思われる。しかるに、気象予報や火山予知などがある程度機能するようになり、防災対策が徐々に整い、災害の回数が少なくなった結果、自然災害に対する人々の認識は宿命的な色合いを薄めてきているように感じる。他方、過去数十年間は国内において人々の大移動が全国的に起こっており、地域社会の機能が弱まった時代である。そこで、従来は機能していた自然災害に関する伝承なども失われつつあり、防災に対する備えは物理的にも精神的にも低下傾向にあるように感じられる。また、新たな土地に移り住んだ人々は、その土地における災害経験の少なさから、安全に対する過大な信頼感さえ醸成されているかに思われる。

自然災害は人々にとっての実体的驚異であった時代は過去のものとなり、近年治にいて乱を忘れ易い環境が形成されつつある。それ故に、自然災害が現実として我々に襲いかかるときは、我々の想像を絶するような規模となって現れる。かかる状況にあっては平時から防災対策を着実に進めることが重要であり、そのためには従前にも増して説得力のある防災計画を策定することが望まれるものと考える。

参考資料

1）「十勝岳災害関連緊急事業の記録」：北海道開発局　旭川開発建設部、平成３年３月

2）「十勝岳爆発災害志」：北海道庁学務部社会課内
十勝岳爆発罹災救済会、昭和4年発行
3）「泥流地帯」：三浦綾子、新潮文庫
4）「続泥流地帯」：三浦綾子、新潮文庫
5）本文は「土木・自然・北海道」2002年3月に掲載した文を一部修正したものである

石田　享平*

北海道開発土木研究所
環境水工部長

図－1　十勝岳爆発災害志（北海道庁学務部社会課内十勝岳爆発罹災救済会、昭和４年発行）より転載